宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第６集

平成８年度

東九州自動車道
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

（西都～清武）

1997

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第６集

平成８年度

東九州自動車道
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

（西都～清武）

1997

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の委託を受け、平成７年度から東九州自動車道（西都～清武）建設予定地に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

これまでに調査を終了した遺跡は９遺跡、平成８年度から９年度にかけて継続する遺跡は11遺跡であります。９年度には新たに数遺跡の調査を予定しております。本書は平成８年度に調査を実施した遺跡の概要報告書であります。この概要報告書が、埋蔵文化財保護の一助となることを期待します。

また、調査に際し、多大なご協力をいただいた清武町教育委員会・宮崎市教育委員会・国富町教育委員会・佐土原町教育委員会をはじめ終始熱心に発掘調査に従事していただいた地元の方々及び各関係機関に対しまして厚く感謝申し上げます。

平成９年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　藤 本 健 一

例　　言

1．本書は、平成 8年度に宮崎県教育委員会が日本道路公団福岡建設局から委託を受けて発掘調査を実施した東九州自動車道（西都～清武）建設予定地に所在する埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．本書に使用した位置図は、国土地理院発行の５万分の１地図をもとに作成し、遺跡周辺地形図は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供を受けたものを基礎としている。

3．本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は髙山・飯田・小山・橋本が行った。

4．平成８年度の調査体制は、下記の通りである。

所　　長　藤本健一
副 所 長　岩永哲夫
庶務係長　三石泰博　　主任主事　磯貝政伸　　主任主事　吉田秀子

調査第一係

（兼）係　長　岩永哲夫
（総括）主　事　飯田博之
（試掘）主　査　髙山富雄
　　主任主事　山田洋一郎

（佐土原村古墳周辺遺跡）
　主　査　川崎辰巳
　主　事　小山　博
　調 査 員　太川裕晴

（山内・桜原・西ヶ迫・黒貫遺跡）
　主　事　日高広人
　調 査 員　稲岡洋道

（上ノ原遺跡）
　主　査　日高裕司
　主任主事　木本　剛

（長薗原遺跡）
　主　査　時任和守
　主任主事　吉牟田浩一

（上ノ迫遺跡）
　主　査　園田和宏
　主　事　大坪博子

（松元遺跡）
　主任主事　柳田益宏

（井手口遺跡）
　主　査　江田　誠
　主任主事　戸高眞知子

（木脇遺跡）
　主　査　倉永英季
　調 査 員　谷川亜紀子

（塚原遺跡）
　主任主事　松原宗一
　調 査 員　筌瀬明宏

（内宮田・塚田・清田迫遺跡）
　主　査　髙橋祐二

（本城跡）
　主任主事　崎田一郎
　主　事　橋本英俊

（白ヶ野遺跡）
　主　査　青山尚友
　主任主事　日淺雅道
　調 査 員　木嶋崇晴
　〃　　井田　篤

（永ノ原遺跡）
　主　査　髙橋祐二
　調 査 員　白岩　修

（町屋敷遺跡）
　主　査　鳥原孝仙

目　次

平成８年度の調査の概要

各遺跡の調査概要 …… 1

各遺跡の調査概要

1．佐土原村古墳周辺遺跡 …… 6
2．山内・桜原・西ヶ迫・黒貫遺跡 …… 8
3．上ノ原遺跡 …… 10
4．長薗原遺跡 …… 11
5．上ノ迫遺跡 …… 14
6．松 元 遺 跡 …… 15
7．井手口遺跡 …… 16
8．木 脇 遺 跡 …… 17
9．塚 原 遺 跡 …… 19
10．内宮田・塚田・清田迫遺跡 …… 21
11．本　城　跡 …… 24
12．白ヶ野遺跡 …… 26
13．永ノ原遺跡 …… 28

表　目　次

平成８年度の調査の概要

表１　東九州自動車道遺跡一覧 …… 2

挿　図　目　次

平成８年度の調査の概要

第１図　遺跡分布図① …… 3
第２図　遺跡分布図② …… 4
第３図　遺跡分布図③ …… 5

各遺跡の調査概要

1．佐土原村古墳周辺遺跡

第４図　調査区模式図 …… 6

第５図　基本土層図 …… 6

第６図　畠跡実測図 …… 7

2．山内・桜原・西ヶ迫・黒貫遺跡

第７図　調　　査　　区 …… 8

第８図　縄文早期遺構分布図 …… 9

4．長薗原遺跡

第９図　基本土層図 …… 11

第10図　周辺地形図 …… 12

第11図　石器出土分布図 …… 13

第12図　遺物実測図 …… 13

5．上ノ迫遺跡

第13図　集石遺構実測図 …… 14

第14図　陥し穴状遺構実測図 …… 14

8．木脇遺跡

第15図　遺物実測図 …… 17

第16図　１号竪穴住居跡実測図 …… 18

9．塚原遺跡

第17図　周辺地形図 …… 20

10．内宮田・塚田・清田迫遺跡

第18図　土層断面模式図 …… 22

第19図　遺構実測図 …… 23

11．本城跡

第20図　本城跡縄張り図 …… 25

12．白ヶ野遺跡

第21図　土層断面柱状図 …… 26

第22図　集石遺構分布図 …… 26

平成８年度の調査概要

調査にいたる経緯

「東九州に高速道を」のスローガンを掲げ官民一体となって展開してきた取り組みは、平成３年 12 月３日の整備計画策定、そして平成５年 11 月 19 日に、建設大臣の東九州自動車道西都・清武の施行命令により実を結ぶこととなった。これを受け、宮崎県教育委員会文化課では、路線の詳細な分布調査を行い、総延長 27.5km の区間に 33 遺跡延べ約 42 万㎡の遺跡対象地を設定し、平成７年度の清武工事区の７遺跡から調査を開始した。調査にあたっては高速道対策局・日本道路公団福岡建設局宮崎工事事務所・東九州自動車道用地事務所と綿密な打ち合わせを行い、調査の時期や問題点、確認調査の場所設定について協議を行った。

調査の概要

８年度の調査は、今まで調査が少なかった低湿地の遺跡が増えてきており、塚原遺跡や内宮田・塚田・清田迫遺跡、町屋敷遺跡等で水田跡の検出が予測され現在調査中である。なかでも宮崎市長嶺の内宮田・塚田・清田迫遺跡は、粘土層堆積の中から古代の水田の区画を検出し、大きな成果をあげることができた。これも調査区の設定、道具の開発等調査員と作業員の工夫と努力によるところが大きい。

佐土原工区は、７月に佐土原村古墳周辺遺跡が調査に入り、山内・桜原・西ヶ迫・黒貫遺跡、長薗原、上ノ迫、上ノ原、下屋敷第１・第２遺跡が相次いで調査を開始した。

ほとんどの遺跡は、船野・都於郡・仲間原等の台地上に位置し、縄文早期から旧石器時代にかけての時期が中心で、集石遺構・炉穴・陥し穴状遺構等が検出されている。

佐土原村古墳周辺遺跡は、古代～中世と考えられる畠跡が検出され、さらに下層からは多量の土師器と須恵器、瓦片、石帯等が出土している。『日向地誌』によると当地周辺には寺院等の記載があることより文献の側からも検討を加える必要がある。

国富工区は井出口遺跡の調査が終了し、現在松元、木脇、塚原遺跡が調査中である。

木脇遺跡は、旧石器時代から古代にかけての遺構・遺物が出土しており、調査区のすべての地区に分布している。とくに調査区南側の緩斜面では、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡約 30 軒、掘立柱建物跡、溝状遺構等を多数確認している。また谷を挟んで北側にある松元遺跡では古墳時代中期の住居跡が検出されている。

塚原遺跡は、用地の取得状況や水路の付け替えなどの問題があり、５月から数回にわたり確認調査を実施し調査区の選定を行って、現在調査中である。

宮崎市から清武町にかけての遺跡は、昨年度からの継続である永ノ原遺跡、白ヶ野遺跡をはじめとして、本城跡が５月、内宮田・塚田・清田迫遺跡が８月、町屋敷遺跡が９年１月に調査を開始した。

永ノ原遺跡と白ヶ野遺跡は台地上に立地しており、遺構は竪穴住居跡、陥し穴状遺構、集石遺構等が確認されている。本城跡は大きく二つの主郭に分けられ、時期差があることが考えられている。

表１　東九州自動車道遺跡一覧

遺　跡　名	所　在　地	調　査　期　間	備　考
蔵向	西都市大字黒生野字蔵向		９年度に調査予定
大辻屋敷	西都市大字黒生野字大辻屋敷		９年度に調査予定
佐土原村古墳周辺	佐土原町大字上田島字平田迫ほか	平成８年７月22日～平成９年３月31日	９年度に継続
山内・桜原・西ヶ迫・黒貫	佐土原町大字上田島字山内ほか	平成８年８月26日～平成９年３月25日	９年度に継続
上ノ原	佐土原町大字西上那珂字上ノ原	平成８年９月24日～平成９年３月23日	９年度に継続
下屋敷第一・第二	佐土原町大字西上那珂字下屋敷ほか	平成９年１月８日～平成９年３月28日	９年度に継続
梅ケ島	佐土原町大字西上那珂字梅ヶ島		９年度に調査予定
待居廻	佐土原町大字西上那珂字待居廻		９年度に調査予定
長薗原	佐土原町大字西上那珂字長薗原	平成８年８月21日～平成９年３月25日	９年度に継続
上ノ迫	佐土原町大字西上那珂字上ノ迫	平成８年８月９日～平成８年11月29日	終　了
松元	国富町大字木脇字松元	平成８年10月14日～平成９年３月31日	９年度に継続
井手口	国富町大字木脇字井出口ほか	平成８年５月８日～平成８年11月29日	終　了
木脇	国富町大字木脇字上ノ原ほか	平成８年５月13日～平成９年３月31日	９年度に継続
塚原	国富町大字塚原字西ノ兎ほか	平成８年９月17日～平成９年３月31日	９年度に継続
中別府	宮崎市大字金崎字中別府ほか		９年度に調査予定
倉岡	宮崎市大字金崎字寺尻ほか		９年度に調査予定
町屋敷	宮崎市大字糸原字町屋敷ほか	平成９年１月14日～平成９年３月31日	９年度に継続
北田	宮崎市大字糸原字北田ほか		９年度に調査予定
上薗	宮崎市大字糸原字上薗ほか		９年度に調査予定
内宮田・塚田・清田迫	宮崎市大字長嶺字内宮田ほか	平成８年９月18日～平成９年３月19日	９年度に継続
本城跡	宮崎市古城町時雨	平成８年５月７日～平成９年３月31日	９年度に継続
白ケ野	清武町大字船引字白ヶ野ほか	平成７年６月７日～平成８年９月30日	終　了
上の原第一	清武町大字船引字上の原ほか	平成７年７月21日～平成７年11月１日	終　了
権現原Ｂ	清武町大字船引字安ヶ野	平成７年12月５日～平成８年３月13日	終　了
権現原Ａ	清武町大字船引字権現原	平成７年９月７日～平成８年３月25日	終　了
竹ノ内・杉木原	清武町大字今泉字竹ノ内ほか	平成７年８月18日～平成８年３月31日	終　了
下星野	清武町大字今泉字下星野ほか	平成７年９月25日～平成８年３月26日	終　了
永ノ原	清武町大字今泉字永ノ原	平成７年９月25日～平成８年７月31日	終　了

遺跡分布図①

1　蔵向遺跡　2　大辻屋敷遺跡　3　佐土原村古墳周辺遺跡

4　山内・桜原・西ヶ迫・黒貫遺跡　5　上ノ原遺跡　6　下屋敷第一・第二遺跡

7　梅ヶ島遺跡　8　待居廻遺跡　9　長薗原遺跡　10　上ノ迫遺跡

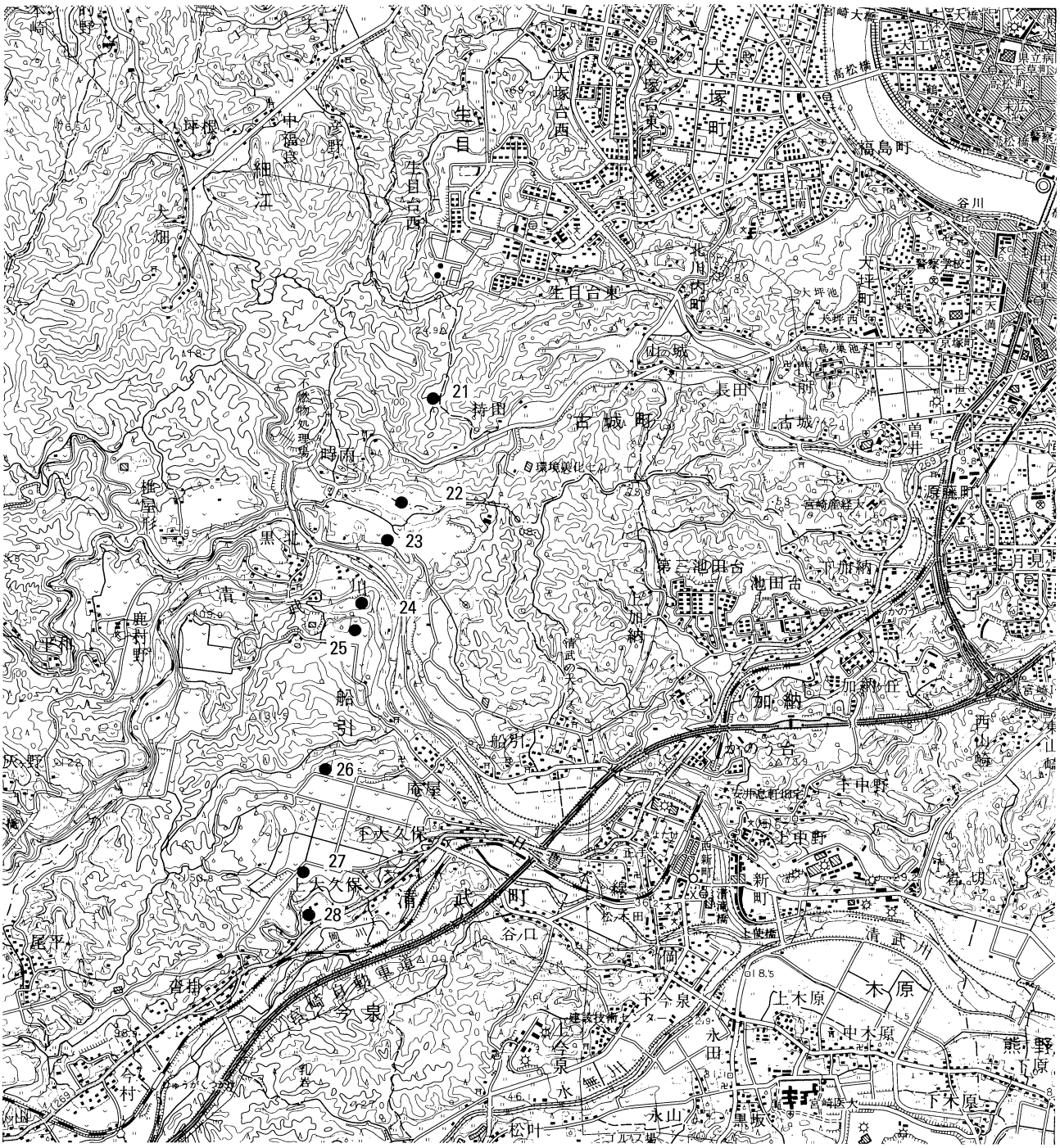
遺跡分布図②

11　松元遺跡　　12　井出口遺跡　　13　木脇遺跡　14　塚原遺跡

15　中別府遺跡　16　倉岡遺跡　17　町屋敷遺跡　18　北田遺跡

19　上薗遺跡　　20　内宮田・塚田・清田迫遺跡

遺跡分布図③



21　本城跡　　22　白ヶ野遺跡　　23　上の原第一遺跡

24　権現原Ｂ遺跡　25　権現原Ａ遺跡　26　竹ノ内・杉木原遺跡

27　下星野遺跡　　28　永ノ原遺跡

各遺跡の調査概要

1．佐土原村古墳周辺遺跡　（佐土原町大字上田島字平田迫ほか）

遺跡の立地

本遺跡は、西都市に隣接する佐土原町北西部にある。調査区の南側と北側には標高約 45 mの丘陵地があり、谷間は畑地・水田として利用されてきた標高約 13 mの平坦地となっている。近くには県指定の佐土原村古墳（横穴）が分布している。調査を進めるにあたって、南側の丘陵を A 区、谷間の平坦地をB区、北側の丘陵をC区と設定した。8月からB区の本調査を開始し、12月に終了した。その概要は以下のとおりである。

調査の概要

（1）畠跡

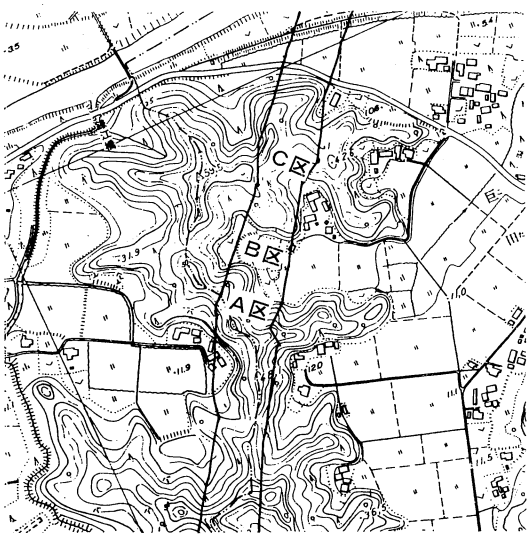
本調査を始めるにあたって、5月から7月にかけてB区に10本のトレンチを入れて確認調査を実施した結果、遺物の検出できる地域が限定されたので、東西に34 m、南北に24 mの広さの調査区域を設定した。まず第Ⅲ層までの除去作業をおこない、第Ⅳ層から手作業にて精査していった。第Ⅴ層の礫層を精査したところ、畝状になった畠跡を検出した。畝幅約30 cm（黒灰色の粘土層）の比較的狭いものである。畝間幅は約50 cmで礫が流れ込んでおり、深さは約10cmである。現在、時代と作物については検討中であるが、第Ⅴ層から第Ⅹ層にかけて奈良・平安期の土師器や須恵器が多く出土していることから、平安時代もしくはそれ以降の畠跡であると考えられる。

（2）遺　物

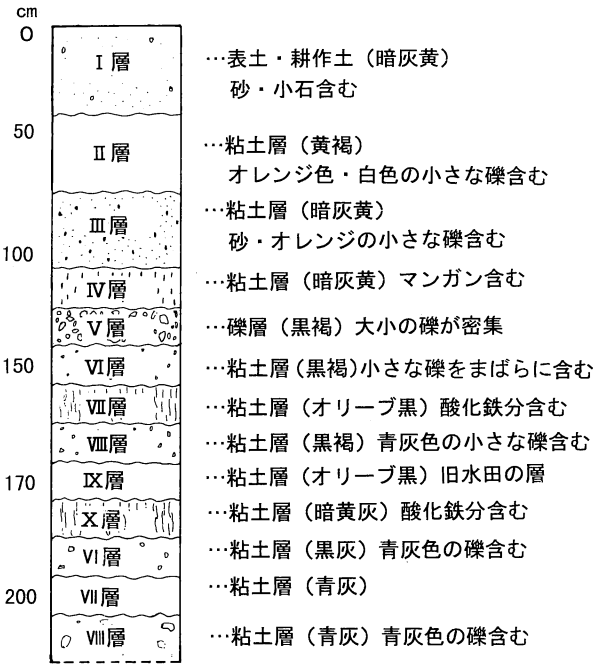
遺物の出土状況は、第Ⅴ層から第Ⅹ層にかけて奈良・平安期の土師器・須恵器を中心に約3,000 点の遺物が出土している。その割合はおおよそ7：3である。遺物のほとんどは小破片である。また瓦片100 点、紡錘車1点、石帯(石灰岩製)1点も出土している。特に、南側と北側に集中して出土していることから､これらの遺物の多くは、山の斜面からの流れ込みと考えられる。

（3）その他

自然科学分析の結果第Ⅸ層（黒褐色土）からプラント・オパールが多く検出されたため、古墳時代から奈良・平安時代にかけての水田跡の調査に取り組んだ。



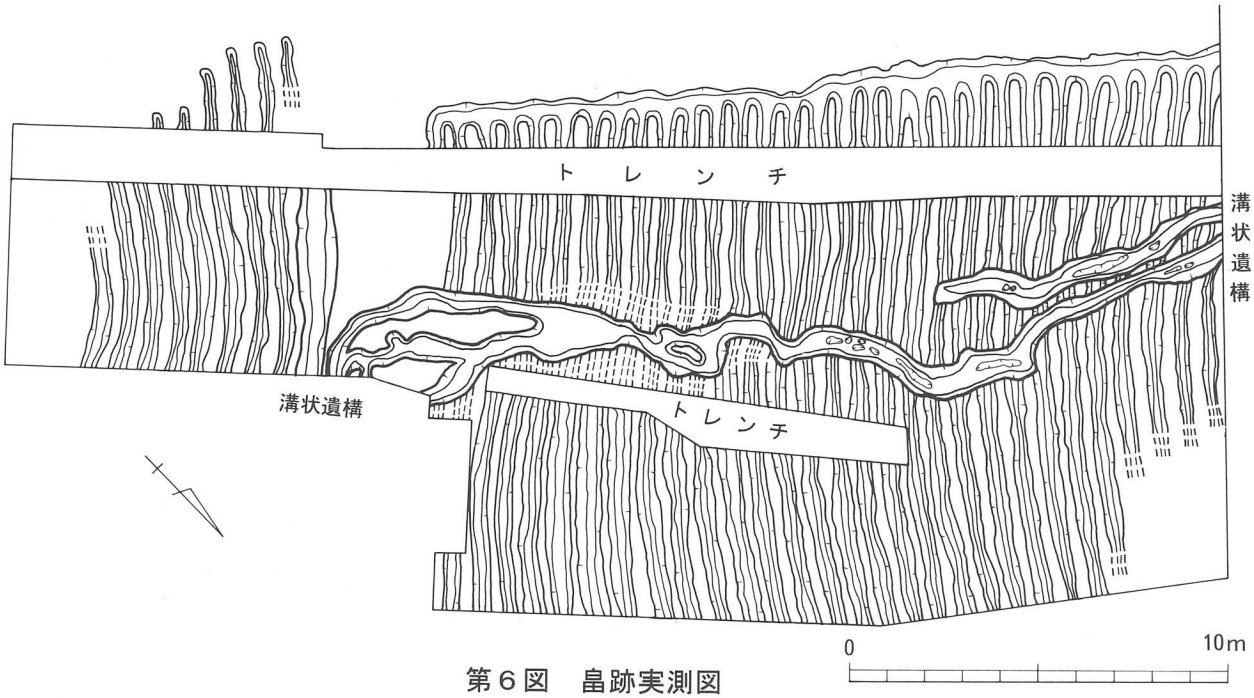
第４図　調査区模式図



第５図　基本土層図

土層断面から棚田のような状態で水田が存在したことを予想できたが、調査範囲が狭かったことや畦畔を確認できなかったことから水田跡の検出はできなかった。

南側・北側の山の斜面には横穴の存在が予測されたため、地下レーダー探査を行い、反応のあった部分を中心に横穴の確認調査を実施している。山頂や尾根部分については、城跡の検出作業を行っている。



第６図　畠跡実測図

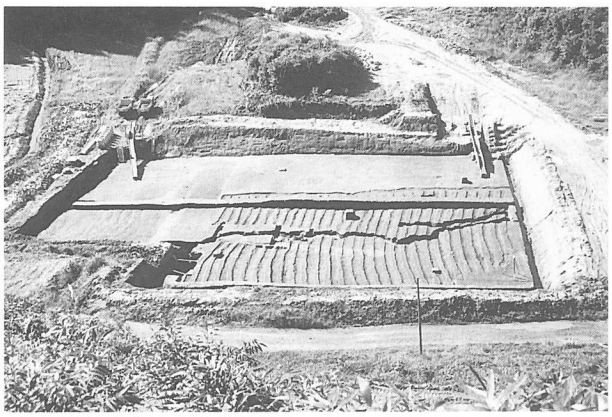


写真１　畠跡全景

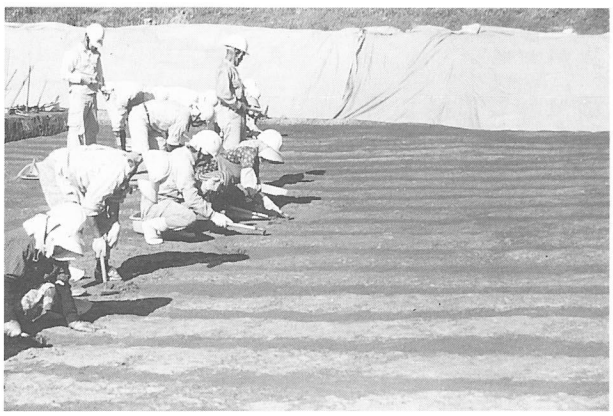


写真２　畠跡検出状況

2．山内・桜原・西ヶ迫・黒貫遺跡　（佐土原町大字上田島字山内ほか）

遺跡の立地

本遺跡は、西都市から佐土原町北西部にかけて広がる都於郡・仲間原台地（標高 100 m）の中央付近に位置する。調査地周辺の地形は比較的平坦であるが、北側は急崖に接し、南側は開析谷に挟まれている。その谷下に湧水点が確認されている。

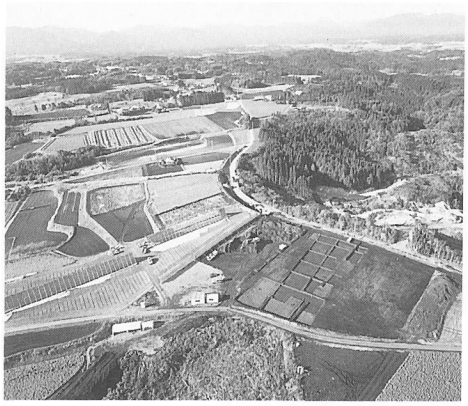
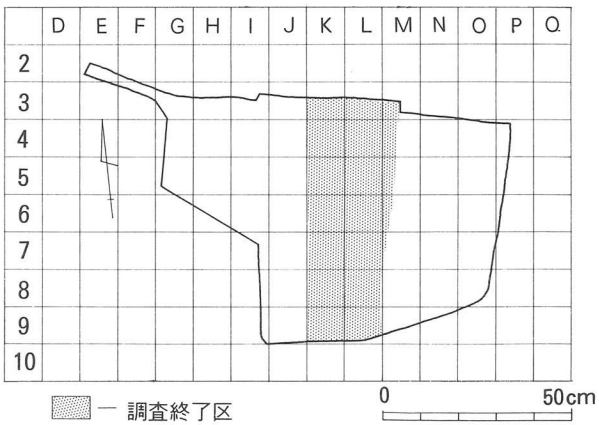


写真３　調査区遠景（南から）

調査の概要

本遺跡の層序は、宮崎平野中央部において比較的標準的な層序であり、年代の指標となる火山灰としてⅡ層にアカホヤ火山灰が約 20cm、Ｖｂ層では小林軽石を含む層が約 15～20cm、Ⅶ層では姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）が約 20cm 堆積している。遺物包含層はⅢ・Ⅳａ～ｂ・Ｖａ・Ⅵａ～ｃ層で確認されている。

調査区の大半は開墾による削平を受け、Ⅱ～Ⅲ層を失っていたが、中央北側および南側においてⅡ層（アカホヤ火山灰）が確認されている。なお、ゴボウ栽培のため幅約 10cm・深さ約１ｍのトレンチャーが幾条も縦横に走り、遺物の包含状況はあまり芳しいものとはいえなかった。以下確認された遺構・遺物について時代別にふれていくことにする。



第７図　調査区（s=1/2,000）

（１）旧石器時代

Ⅵａ～ｃ層において三稜尖頭器、二次加工剥片、剥片等が、またＶａ層において細石核（水晶製）、細石刃等が散発的に出土している。なお、攪乱土中より神子柴型石斧が出土している。石材については主に頁岩が大半を占め、シルト岩、砂岩等が使用されている。遺構は配石遺構２基、陥し穴状遺構が２基検出されている（写真４）。そのうち陥し穴状遺構は長径約 140cm、短径約 100cm の楕円形を呈し、検出面より深さ 150cm を計る。埋土状況より小林軽石降灰以後のものとみられる。

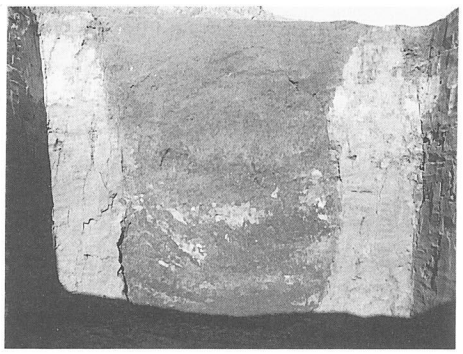


写真４　陥し穴状遺構（埋土状況）

（２）縄文時代早期

Ⅲ～Ⅳ層にかけて貝殻文円筒形土器（前平式土器）、無文土器等が出土している。また石器は石鏃、スクレイパー、局部磨製石斧、打製石斧、楔形石器（攪乱中）、磨石、台石等が出土している。石材には黒曜石、赤色チャート、頁岩、砂岩、溶結凝灰岩（尾鈴酸性岩）等がみられ旧石器時

代と比べ使用する石材が豊富になる。

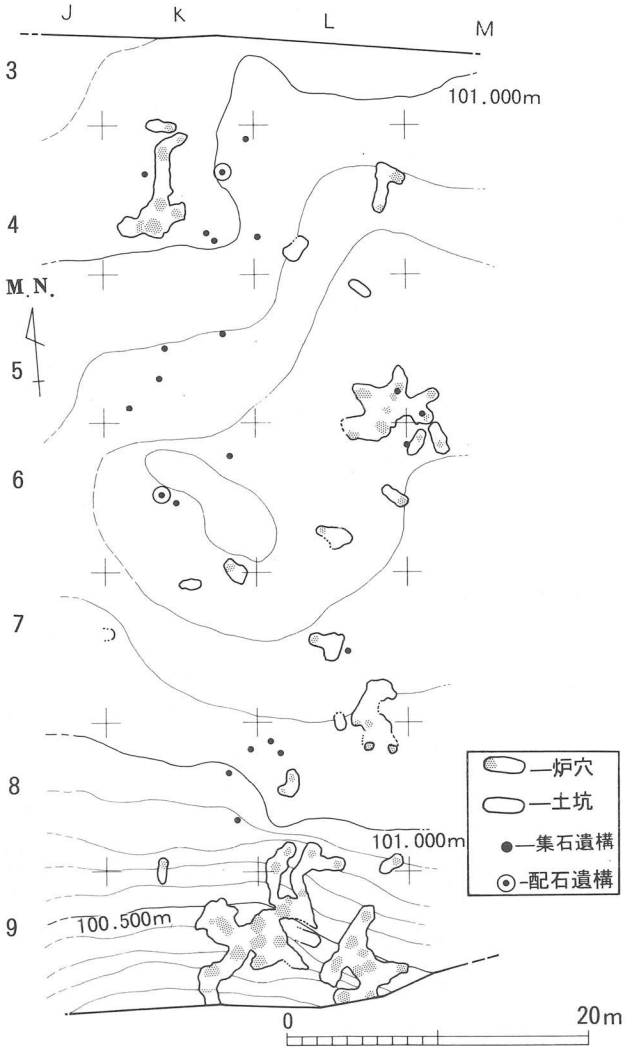
遺構は集石遺構 30 基、炉穴 65 基以上、配石遺構 1基、土坑 4基が検出されている（第８図）。炉穴の分布状況は、単独で検出されるものと切り合いにより群をなすものとがみられ、平坦面に比して傾斜面においてより密にみられる。

（３）その他の時代

近世の道路状遺構が１条検出されており、陶磁器、すり鉢、瓦等が出土している。なお、時期不明ではあるが陥し穴状遺構が１基（アカホヤ火山灰降灰以降）確認されている。

縄文時代早期において現在のところ炉穴が 65 基以上と多数検出されており、九州内においてもこれほど検出された例はなく、今後の調査によりさらに分布が広がる可能性があり、注目される。

集石遺構と炉穴の時期については一部で切り合い関係が確認されて、どちらも貝殻文円筒形土器が伴うことから近い時期に構築されているものと考えられる。双方とも現在のところ調理施設と考えられているが、本遺跡のようになぜ一時期に、これだけ多くの調理施設が構築されなければならなかったのか、これからの調査はその疑問を少しでも解決すべく検証に努めたい。



第８図　縄文早期遺構分布図（S=1/500）

写真５　炉穴検出状況（１）

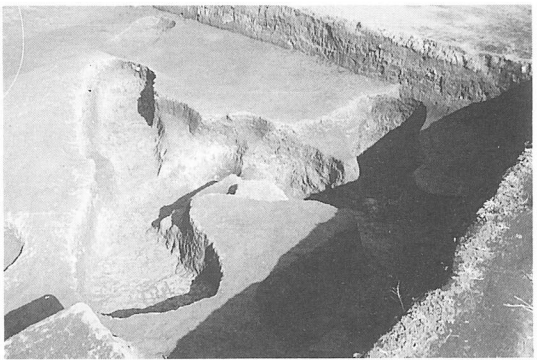


写真６　炉穴検出状況（２）

3．上ノ原遺跡　（佐土原町大字西上那珂字上ノ原）

遺跡の立地

上ノ原遺跡は佐土原町の北西部の標高約 90 mの台地上に位置している。谷間を挟んで南は下屋敷第一・第二遺跡がある。また、東に約 3.5 kmには船野遺跡が所在している。

調査の概要

調査に当たっては、便宜上４つの地区に分け、南東部より調査を開始した。

基本層序として、Ⅰ層（表土）、Ⅱ層（褐色土層）、Ⅲ層（黒色土層）、Ⅳａ層（二次アカホヤ層）、Ⅳｂ層（アカホヤ層）、Ⅴ層（黒色土層）、Ⅵ層（褐色土層）、Ⅶ層（小林軽石を含む層）が確認できたが、Ａ区全体にわたって、地表から約１ｍの深さまで耕作による攪乱を受けており、場所によってはⅦ層（小林軽石を含む層）まで及んでいた。

調査区の東端と西半分は表土下にⅣ層（アカホヤ層）が残存しており、縄文時代、旧石器時代の遺物、遺構の検出を主眼として調査を進めた。

主な遺構として、Ⅳａ層上面で土坑２基（埋土はⅢ層黒色土、時期不明）、溝状遺構３条（埋土はⅢ層黒色土、時期不明）を検出した。Ⅳｂ層上面では柱穴群（埋土はⅢ層黒色土）を検出した。

また、Ⅴ層上面で土坑２基（埋土はⅣａ層・二次アカホヤ）を検出した。Ⅵ層上面で土坑１基（埋土はⅢ層黒色土とⅣｂ層アカホヤまじり、縄文時代早期）、集石遺構１基（縄文時代早期）を検出した。

遺物としては、Ⅳａ層面で縄文時代から平安時代にかけての土器片（縄文晩期の孔列文土器、弥生時代の甕、壺、平安時代の土師器の甕など）、磨製石斧等の石器が出土した。これらの多くは、地形の傾斜にそって流れ込んできたものと思われる。

また、Ⅴ層、Ⅵ層面から縄文時代早期の貝殻条痕文土器片、山形押型文土器片、石鏃や磨石などが出土した。

現在、Ⅶ層の上面まで調査が進んでいるが、今後、Ⅶ層下の旧石器時代包含層の調査を予定している。

写真７　調査区近景（東側から）

4．長薗原遺跡　（佐土原町大字西上那珂字長薗原）

遺跡の立地

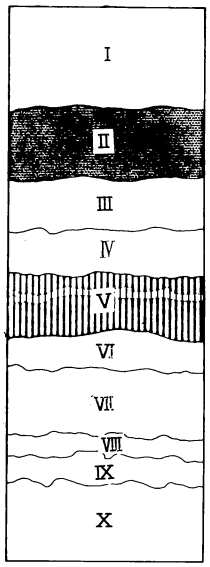
本遺跡は、東西に舌状に延びる台地の根幹部に開けた南に向かってゆるやかに下る斜面に位置する。

調査の概要

①　層序

本遺跡は、ゴボウ栽培の畑地で表土から120　cm～　130　cmまで耕作による削平を受け、アカホヤ層や黒色土層の一部だけが残る状態であった。A区には埋没谷が存在することが、V層を掘り下げる時点で判明した。

A区、B区ともにAT層が確認できなかったが、ブラックバンド層がⅧ層とⅨ層間に、部分的に残存していた。各層とも場所により層の厚さが違い、また、層が途切れるところもあった。



第９図　基本土層図

②　現在までの状況

本遺跡は、A区・B区・C区・D区・E区・F区に分けて調査しており、現在A・B区の調査を終了し、C区の調査を実施しているところである。

＜A区＞

Ⅲ層から縄文時代早期の土器片を出土したが、磨耗が激しい状態であった。Ⅳ層からは多数の貝殻条痕文土器・押型文土器・石鏃等を出土した。

炉穴は１基検出された。その埋土の中に前平式土器が入っていたため、縄文時代早期の炉穴であろうと考えられる。土坑は２基出土しているが、時期は不明である。

Ⅶ層からは３ヶ所の石器群が確認された（第11図）。ナイフ形石器や台形様石器・スクレイパー等が出土した石器群には、剥片・チップ・石核等を伴っていたので、この場所で石器を製作していたことがうかがえる。ナイフの形態から後期旧石器時代の遺物と考えられる。

＜B区＞

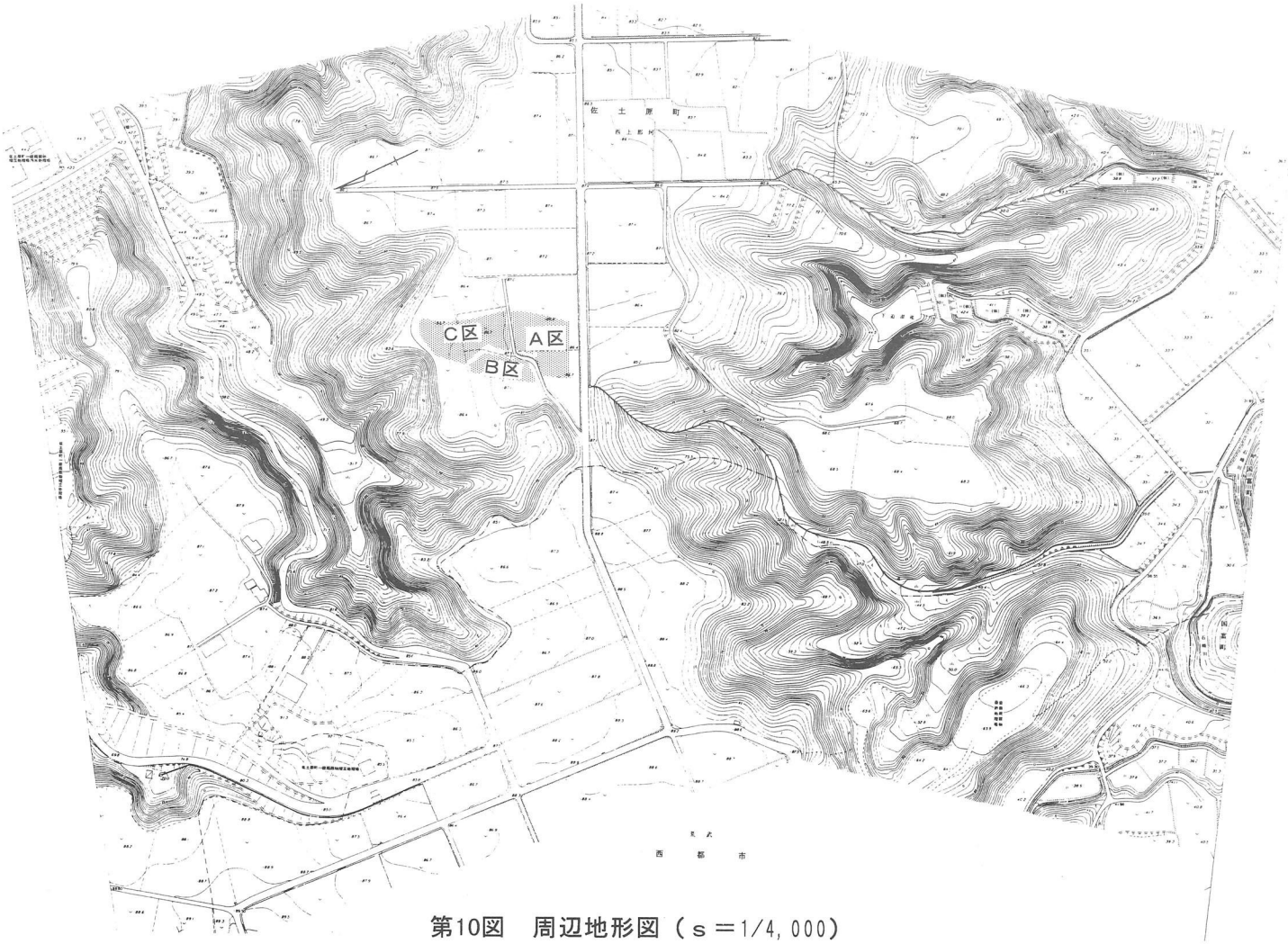
B区はV層（小林軽石を含む層）まで遺物の出土はなく、Ⅵ層からナイフ形石器・スクレイパー・縦長剥片・剥片等が出土しているが、少量である。Ⅶ層からは後期旧石器時代と見られる剥片尖頭器・ナイフ形石器が群をなして出土している。石器群は１ヶ所であった。

＜C区＞

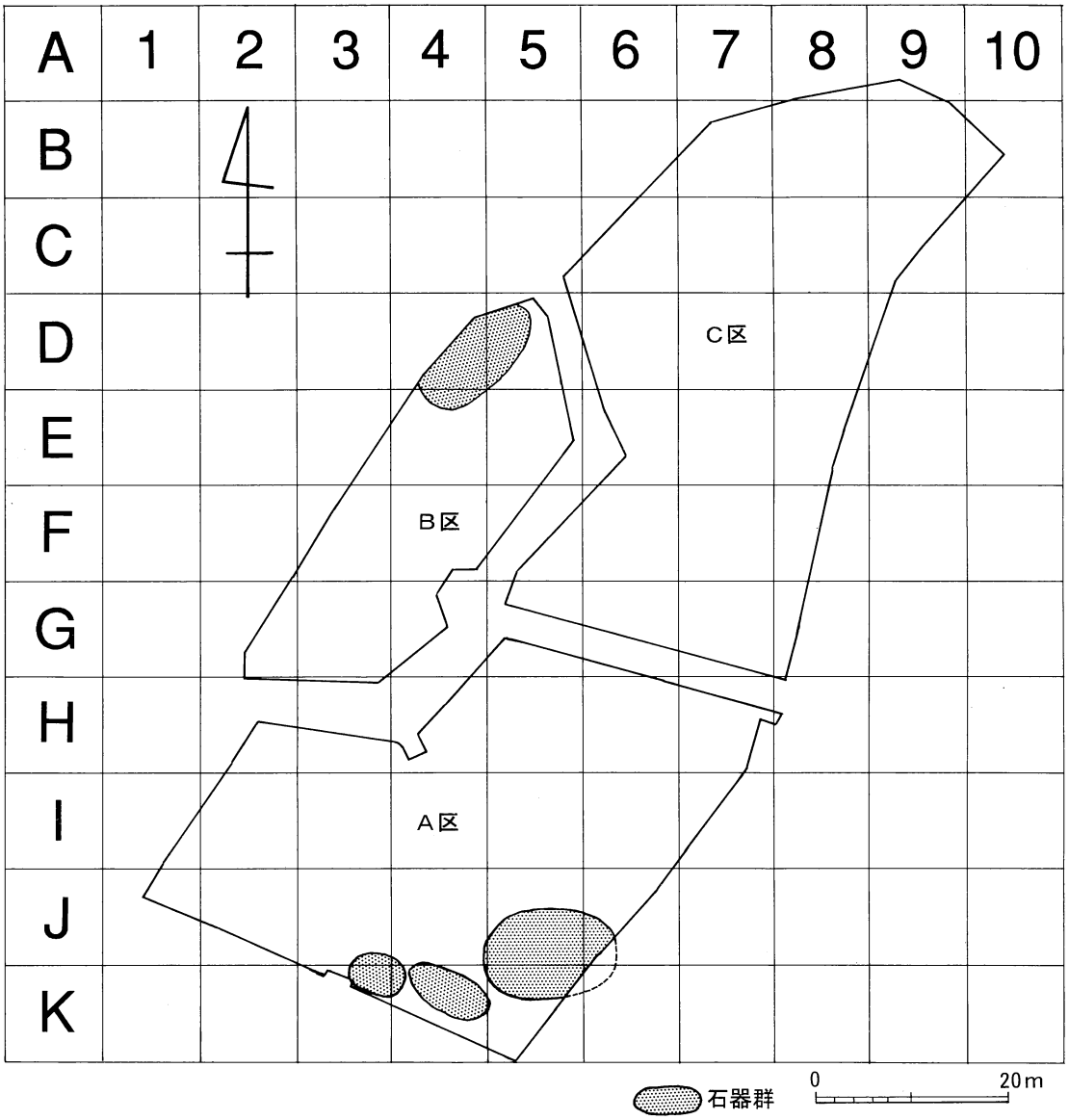
C区は現在Ⅵ層からⅦ層を調査中であるが、これまでに陥し穴２基、炉穴１基、土坑１基の存在を確認したところである。

遺物の数は現在のところ少ないが、Ⅵ層からナイフ形石器・剥片等、Ⅶ層からナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・剥片等が出土している。

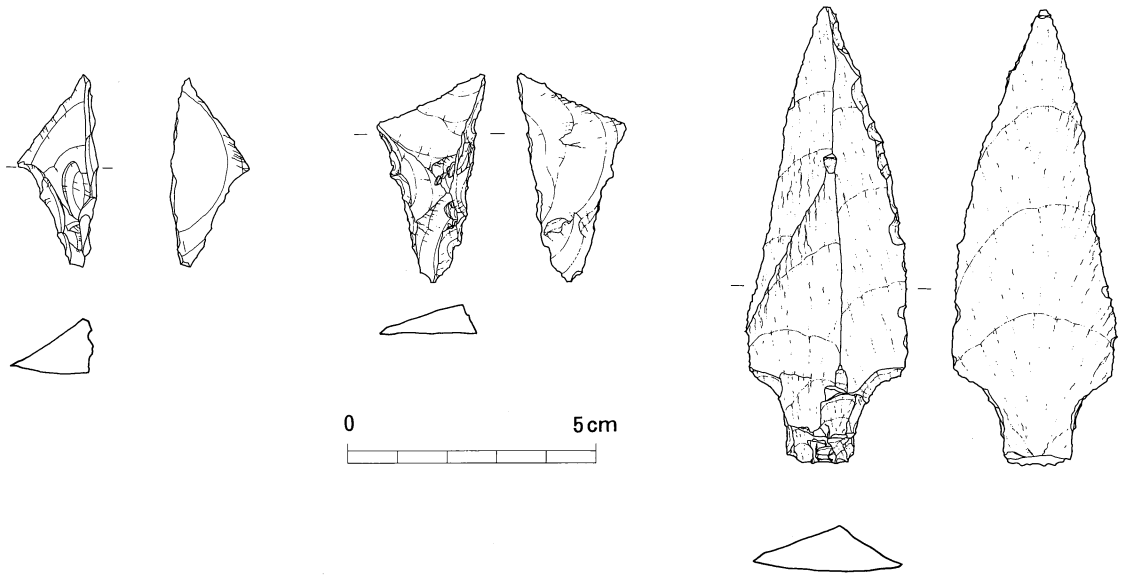
写真８　調査区全景



第10図　周辺地形図（ｓ＝1/4,000）



第11図　石器出土分布図



第12図　遺物実測図

5．上ノ迫遺跡　（佐土原町大字上那珂字上ノ迫）

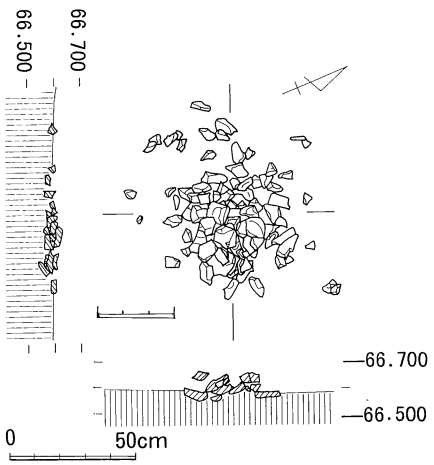
遺跡の立地

上ノ迫遺跡は南に突き出した標高約 60 mの台地上にあり、長薗原遺跡と隣接している。本遺跡は畑として利用されているが、かなり削平を受けて旧地形はほとんど残っていない。調査を行った箇所は、台地の縁辺部にあたり、旧地形が残っており、東の谷に向かって傾斜している。

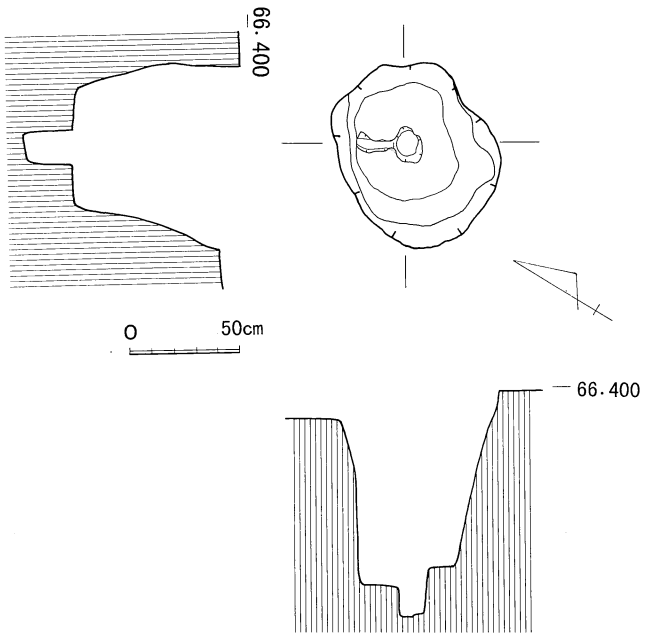
遺跡の概要

本遺跡の基本層序は、第Ⅰ層から第Ⅶ層までである。第Ⅰ層は耕作土・表土、第Ⅱ層は二次アカホヤ、第Ⅲ層は褐色土で上部は小林軽石の風成層で柔らかな土質であり、下部は小林軽石を含み、やや硬質層になっている。第Ⅳ層は上部は細粒で軟質、下部は硬質で褐灰色である。第Ⅴ層はテフラ層で上部は黄橙色火山灰で数 cm のパイプ構造が認められることから姶良入戸火砕流堆積物と考えられる。

調査区は都合上２つの地区に分けて掘り下げていった。遺構については、時期不明の土坑６基、陥し穴状遺構１基、集石遺構２基が検出された。集石遺構は、いずれも直径 40 cm程度の大きさかつ焼けて赤変しており、中央に炭化物を検出した。石の大きさは拳大程度で円礫で形成されている。陥し穴状遺構は、直径約 70 cm、深さは検出面から約１m程度である。Ⅳ層中で検出され、埋土がほとんど小林軽石を含む土質であった。また底部にピットを確認した。遺物については、Ⅳ層より石材となる頁岩やチャート及び黒曜石が出土した。



第13図　集石遺構実測図



第14図　陥し穴状遺構実測図

６．松元遺跡　（国富町大字木脇字松元）

遺跡の立地

本遺跡は、標高約 55 ｍの南に向けて開けた台地上にあり、南には大淀川水系の岩知野川が流れている。調査対象面積は１１，４００㎡である。

調査の概要

調査区域を南からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区の４つに分け、調査を進めている。基本土層は、Ⅰ層～Ⅻ層に分かれる。Ⅰ層は表土、Ⅱ層は黒色土、この中に新燃岳スコリア・文明軽石・高原スコリアが含まれる。Ⅲ層は褐色土で、古墳時代の土師器、須恵器を含む。Ⅳ層は二次アカホヤ、Ⅴ層は褐色土で縄文早期の土器類を含んでいる。Ⅵ層は褐色土と黒色斑状をしたやや硬質な土のブロックを含み（小林軽石）、Ⅶ層は小林軽石を含む硬質層。Ⅷ層は褐色の土と黒色斑状の土が混じる。Ⅸ層は黄褐色をした土で粘性があり水分を含む。Ⅹ層は褐色をした土で黒色斑状がリング状に見える。Ⅺ層は緑灰色をした硬質状のＡＴの風成層と考えられる。Ⅻ層はＡＴである。

遺構については、Ａ区だけを調査したが、集石遺構が 15 基、住居跡が４軒見つかっている。また、時期不明の土坑が２基ある。集石遺構は、いずれも直径が１ｍ 50 ｃｍから２ｍ程の大きさで炭化物や土器片を含んでいる。全体的に北西斜面に 12 基が点在し、集石遺構の３基は中央部に位置している。

住居跡は二次アカホヤ面で検出したのが１軒、Ⅴ層面で検出したのが３軒である。いずれも埋土が第Ⅲ層の褐色土を含んでいたことや住居跡内から出土した土師器等より古墳時代のものと考えられる。全体的に小型の住居で４ｍ×３ｍ程の広さ、住居内には石皿や焼土化した場所があり炉の穴はない。いずれも柱穴は２本しか確認できなかった。

遺物については住居跡の中から土師器や須恵器、黒曜石等が出土している。また、Ⅴ層から貝殻条痕文系土器、押型文土器、無文土器等が出土している。石器は現在のところ石錐や剥片石器等が出土している。

写真９　竪穴住居跡

7．井手口遺跡　（国富町大字木脇字井手口ほか）

遺跡の立地

本遺跡は、国富町の南東部に位置し、北東側に松元遺跡・南西側に木脇遺跡と、三方を台地に囲まれた地形である。

調査区域の中央に岩知野川が流れ、その流れに沿って北西から南東にゆるやかに傾斜する水田地帯である。その上位にある貯水池からは常に水が流れ込んでいる。

写真10　調査区全景

調査の概要

自然科学分析の結果、高原スコリアを含む層に稲のプラント・オパールの存在が確認され、中世において水稲耕作が行われていたという可能性が出てきた。

調査は、畦畔検出など発掘調査が緻密に行えるよう５ｍグリッドを組み、サブトレンチの土層断面上で高原スコリアを含む層のレベル差を確認しながら進めた。

その結果、断面観察上では高原スコリアを含む層が棚田状に落ち込んでいる部分（水平な面と段差）が数か所確認された。しかし、畦畔は土圧や現代の水田耕作などによる攪乱や削平のため、検出は困難であった。また、各地層の接合面が全般的に上下に激しく攪乱されており、人畜等の足跡や稲株跡も確認するまでには至っていない。

一方、調査区中央に東西に伸びるトレンチを入れた際、高原スコリアを含む層より下位層（灰褐色粘質土）から、古墳時代と思われる須恵器片が 32 点出土した。

調査の結果、トレンチとほぼ重なるような形で西から東に流れる幅 80cm ほどの溝が検出され、その南側に直径約１ｍの大きな木の株が１本、さらに北側の対岸５ｍ四方で、溝に流れ込むようなかたちで須恵器片を 31 点検出した。

また、調査区の西側では、部分的ではあるが北西から南東に流れる幅約 10 ｍ・深さ約３ｍの流路が検出された。溝への分岐点では、流路側深さ 1.5 ｍから土師器の壺がほぼまとまった形で一個体分出土した。その近くには、数本の木が重なって倒れ込み、さらに、深さ 2.5 ｍの礫層の中からは遺物（丸底の壺や高坏等の土器片）が多数出土した。この礫層は、流路側面を一部削り取るような形で堆積しており、当時一時的にしろ、本遺跡がかなり強い水の影響を受けた時期があったことを物語っている。

8．木脇遺跡　（国富町大字木脇字上之原）

遺跡の立地

木脇遺跡は、大淀川水系岩知野川の南に位置し、岩知野川の南に面する標高約 40 m～ 50 mの緩かな台地にある。遺跡の南側には５世紀から６世紀にかけて築造された木脇塚原古墳群、北西には木脇城跡がある。この台地の南側には水田地帯が広がっている。

調査の概要

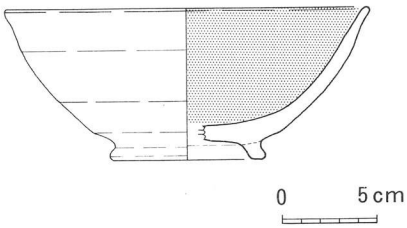
緩かな台地を削平して畑を作っているため、遺跡の北側ではアカホヤ火山灰層の下層から調査することになった。また、中央部では耕作によってアカホヤが削平されているところもあったが、高原スコリアを含む黒褐色土層から調査を進め、現在アカホヤ面で住居跡を検出中である。

調査区の北側では、アカホヤの下層から調査を実施し、縄文時代早期の遺構・遺物を検出した。主な遺物・遺構としては、押型文（山形・楕円）土器、貝殻文系土器、石鏃、磨石、石皿等が出土している。集石遺構も 10 数基検出している。県内では田野町の札ノ元遺跡をはじめ椎屋形第２遺跡で確認されている炉穴も数基検出している。また、小林軽石層とＡＴ層の間の褐色土層から接合可能な頁岩の母石とその剥片群、ナイフ形石器（写真 11）を検出している。この旧石器時代の剥片群は大きく分けると３つのユニットから成り立っている。頁岩を中心とし、チャート製の剥片尖頭器（写真 12）も出土している。また耕作土中から三稜尖頭器も出土している。溝状遺構も数条あり、その下層から硬化面も検出している。

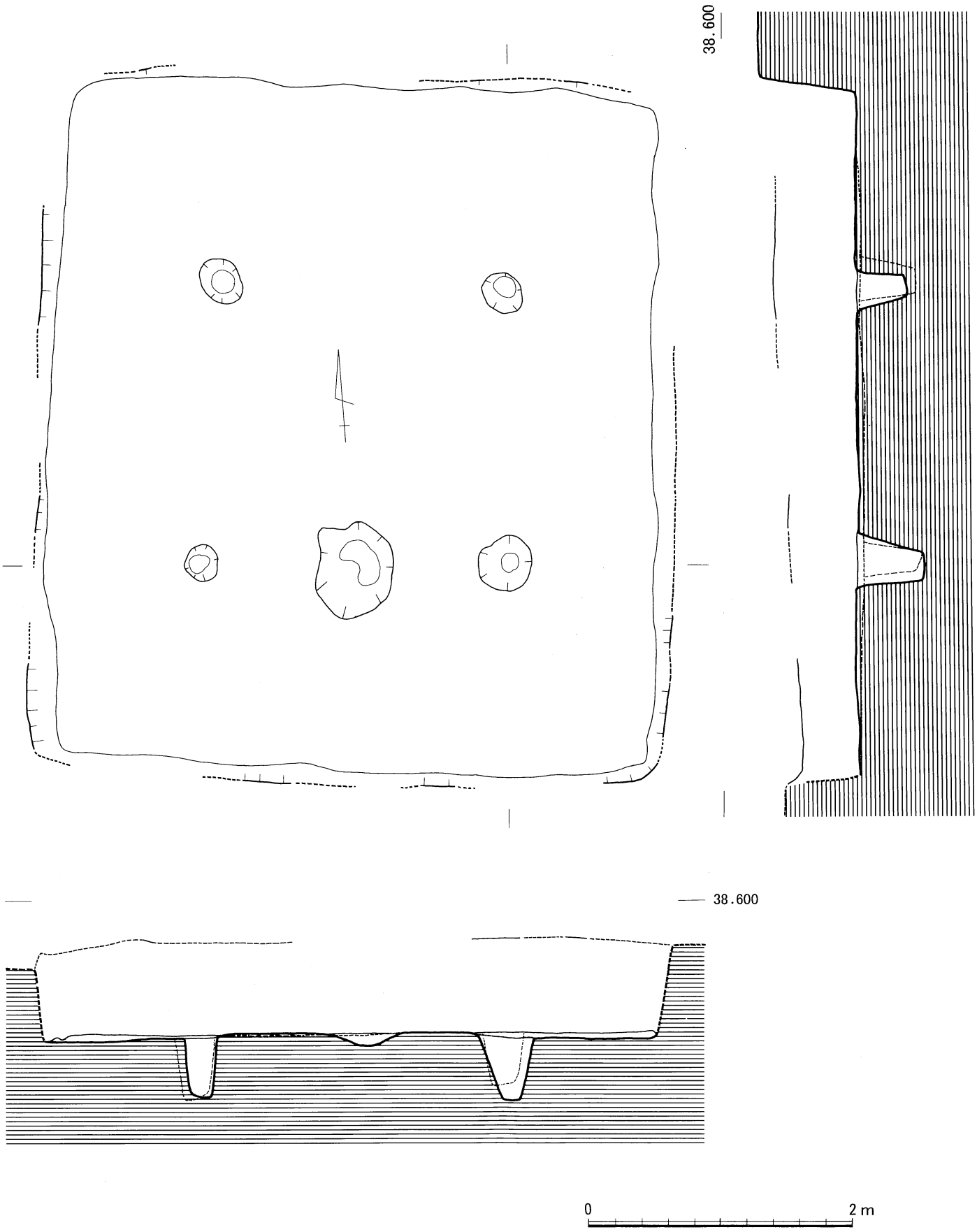
調査区の南側のなだらかな斜面では、アカホヤ面で溝状遺構を数条、柱穴を多数、竪穴住居を約 30 軒検出している。現在調査している住居跡（第 16 図）からは、古墳時代中期の高坏等が出土している。他の住居跡の遺物は、土師器の壺・甕・高台付埦（第 15 図）、須恵器の坏身・蓋・埦等が出土している。

写真11　ナイフ形石器

写真12　剥片尖頭器



第15図　遺物実測図



第16図　1号竪穴住居跡実測図（s＝1/40）

9．塚原遺跡　（国富町大字塚原字西ノ兎）

遺跡の立地

本遺跡は本庄台地から流れ込む小河川により形成された沖積地で、現在は水田として利用されている。隣接する西側の台地上には木脇塚原遺跡があり、弥生時代中・後期から古墳時代にかけての集落が検出されている。

調査の概要

確認調査は用地や暗渠の問題等があり、場所を設定しながら３回に分けて行った。基本土層は第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層が灰褐色砂粒、第Ⅲ層が高原スコリアを含む黒色シルト層、第Ⅳ層が黒泥層、第Ⅴ層が泥炭化層から構成される。

調査の結果、A 区は第７トレンチのⅢ層から B 区と設定した調査区内の第１・２トレンチでは第Ⅲ層、第６トレンチでは第Ⅳ層からプラント・オパールが検出された。C 区は第４トレンチのⅣ層、第５トレンチのⅢ層からプラント・オパールが検出された。また第４・６トレンチのⅢ・Ⅳ層からは土師器や須恵器片が出土している。

第４・６トレンチのⅣ・Ⅴ層からは、溝や棚田と考えられる段差もみられる。

９月中旬より確認調査の結果をもとに A 区の本調査を開始した。現在グリッドごとに第Ⅳ層までの掘り下げを行い流路や溝等を確認し、検出作業を行っている。

写真13　調査区全景

第１７図　周辺地形図（ｓ＝１/２，５００）

10. 内宮田・塚田・清田迫遺跡 （宮崎市大字長峰字内宮田ほか）

遺跡の立地

本遺跡は宮崎市西部大谷川の両岸、標高８ｍ～ 10 ｍの低地に位置する。今回の調査では、大谷川の左岸側を調査し水田遺構を検出した。遺跡の現況は畑地と水田で、層序は後掲する土層断面模式図のとおりである。

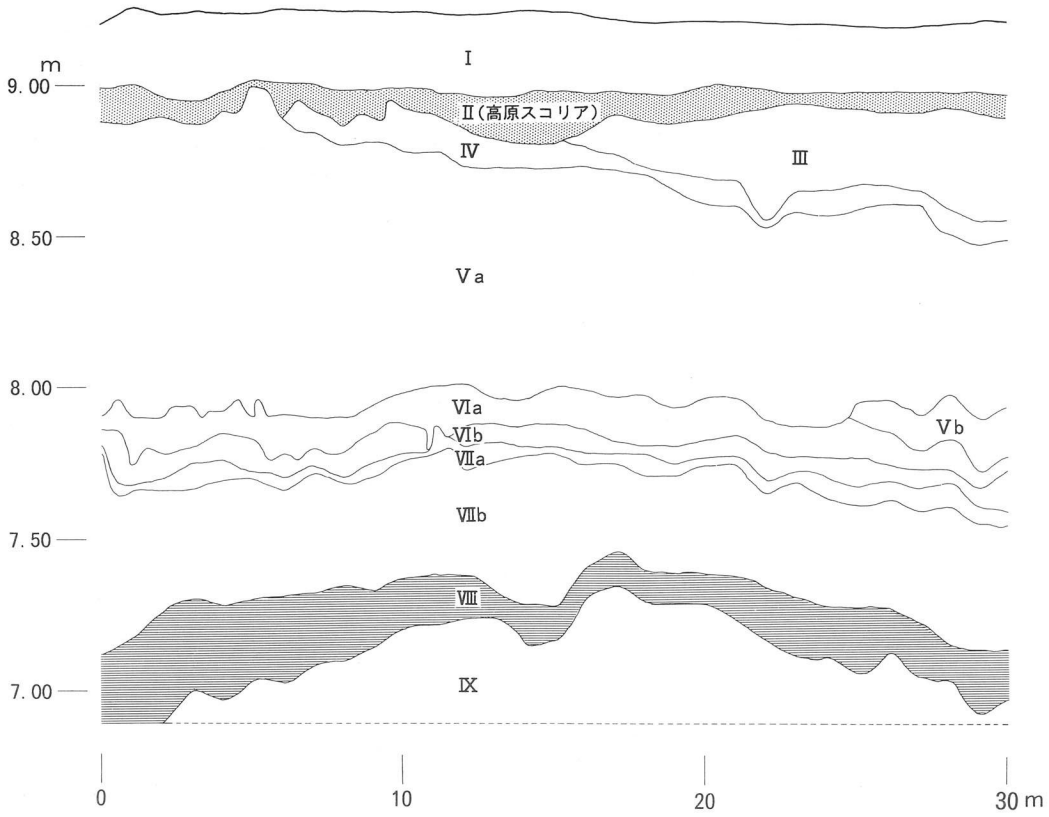
調査の概要

土質は、第Ⅲ層以下は粘性がありシルト質となる。第Ⅷ層は炭化中途の植物に由来する褐色から茶褐色を呈する層である。各層とも、乾燥すると非常に固くなるとともにひびが入り、トレンチ壁面付近では崩壊しやすい。水分を含んだ状態では強い粘性があり、地表面は滑りやすく、発掘作業は困難であった。

第Ⅵ層から第Ⅶ層にかけて、自然科学分析で多くのプラント・オパールを検出しており、この結果から水田跡の存在が予想された。表土の下位（旧表土）から土師器、須恵器、陶磁器、貨幣等が出土した。土師器は平安時代と思われるものが中心で、中には布目圧痕をもつ土器片もある。須恵器は格子目叩きの甕、貨幣は江戸後期の寛永通宝である。出土した遺物の時代の幅が広いことから、流れ込み等に起因する遺物の集中と考えられる。また、旧表土には第Ⅱ層がまじり、長年の流れ込みと耕作の可能性を示す。第Ⅵ層では、土師器が出土している。

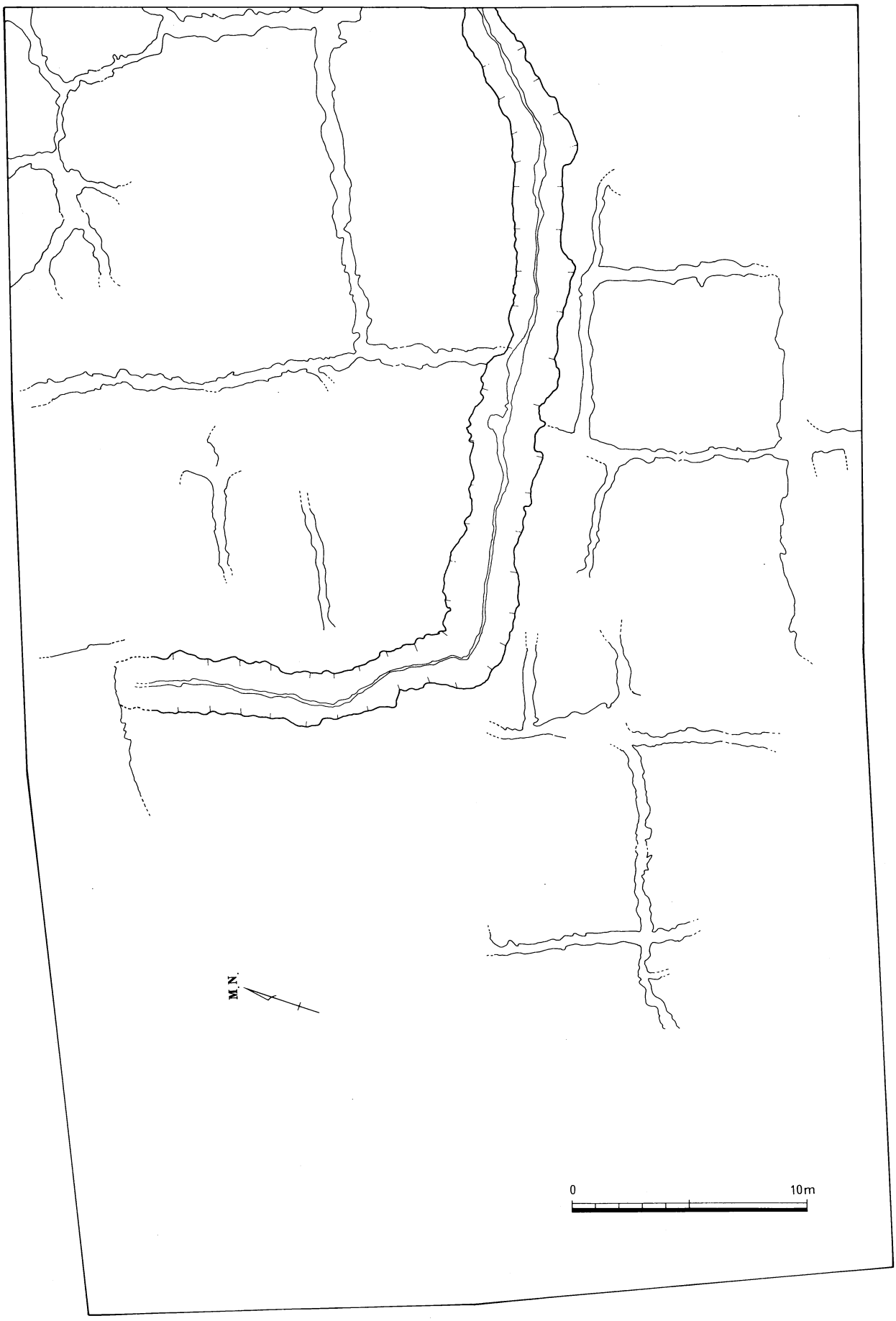
遺構は、溝状遺構と水田跡が検出された。溝状遺構は、第Ⅴ層の下位から掘り込まれたと考えられる。その幅は約 1.5 ｍ、第Ⅶ層に達し遺跡中央を東西に約 40 ｍ続くもの、それと交差するように南北へ２本の細いものが検出された。その埋土中に須恵器の甕の一部が出土した。また、現在のところ、第Ⅴ層と第Ⅵ層の境界面で、平面的に水田の区画を数枚検出した。一区画８ｍ×６ｍのものがある。畦畔は十文字状や放射状の連結を呈する部分を有する。出土した土師器から、奈良時代に位置付けられる水田跡と考えられる。その他の区画を確認するには、自然科学分析等を実施して、慎重に検討を加える必要がある。従来、本遺跡のような沖積層の遺跡については、その発掘作業の困難さから、発掘調査が試みられることが少なかった。これを考慮すると、本遺跡で水田跡と溝状遺構を検出できたことは、発掘調査の技術的な側面をも含めて、意義があると思われる。

写真14 畦畔検出状況



第18図　土層断面模式図

写真15　調査区全景



第19図　遺構実測図（s＝1/200）

11. 本城跡　（宮崎市古城町時雨）

遺跡の立地

本城跡は、宮崎市古城町時雨の宮崎平野を東に見る標高約 110 mの２つの山にわたって築かれている中世山城である。城の東に古城谷、北川内谷がありその谷に挟まれて山ノ城跡・古城跡さらに約１km に、伊東氏 48 城に数えられる曽井城を望むことができる。城の西側は、比高差 60 mに古城川を見下ろし監視ができる地勢にある。築城の手法からみると、北側の方は自然地形をそのまま利用し人為的な施設は南側丘稜先端部に堀切が１本あるのみで屋敷地的な性格がうかがわれる。一方、南側の城は虎口・土塁・腰曲輪などの施設が設けられ、城の機能分担が見られる。北側の城は主に南を、南側の城は、東を警戒する位置関係にある。２城を連携するものと想定した場合、西が手薄であることから東の平野部に重点を置いていると考えられる。どちらも自然の要害を利用し、大小の曲輪を配置しているため、攻めるに難く、守るに易い城であったと考えられる。

調査の概要

（１）北側の城

最高所の曲輪Ⅰが、北側の城の主郭部分にあたるとみられ、四方に小郭を配置している。曲輪Ⅳ・Ⅴおよび A には昭和初期まで集落が営まれていたらしく、遺構の残存状況は良好とはいいがたい。縄張り図中の A・B・C・D 地点から陶磁器片、約 200 点が表土付近から出土した。江戸時代末期が大半を占めるが中世に辿るものもみられる。また、B 地点の第Ⅲ層・D 地点の第Ⅱ層からヘラ切り底と糸切り底の土師器片が 50 点余り出土している。C 地点の高まりから、ヘラ切り・糸切りの混在する完形の土師皿が 10 数枚重なって検出された。縄張り図中の C 地点で柱穴が散見されるが、建物として復元できるものは現在のところ確認されていない。中世・近世以外では、土錘 30 点余りと縄文土器片数点が出土している。

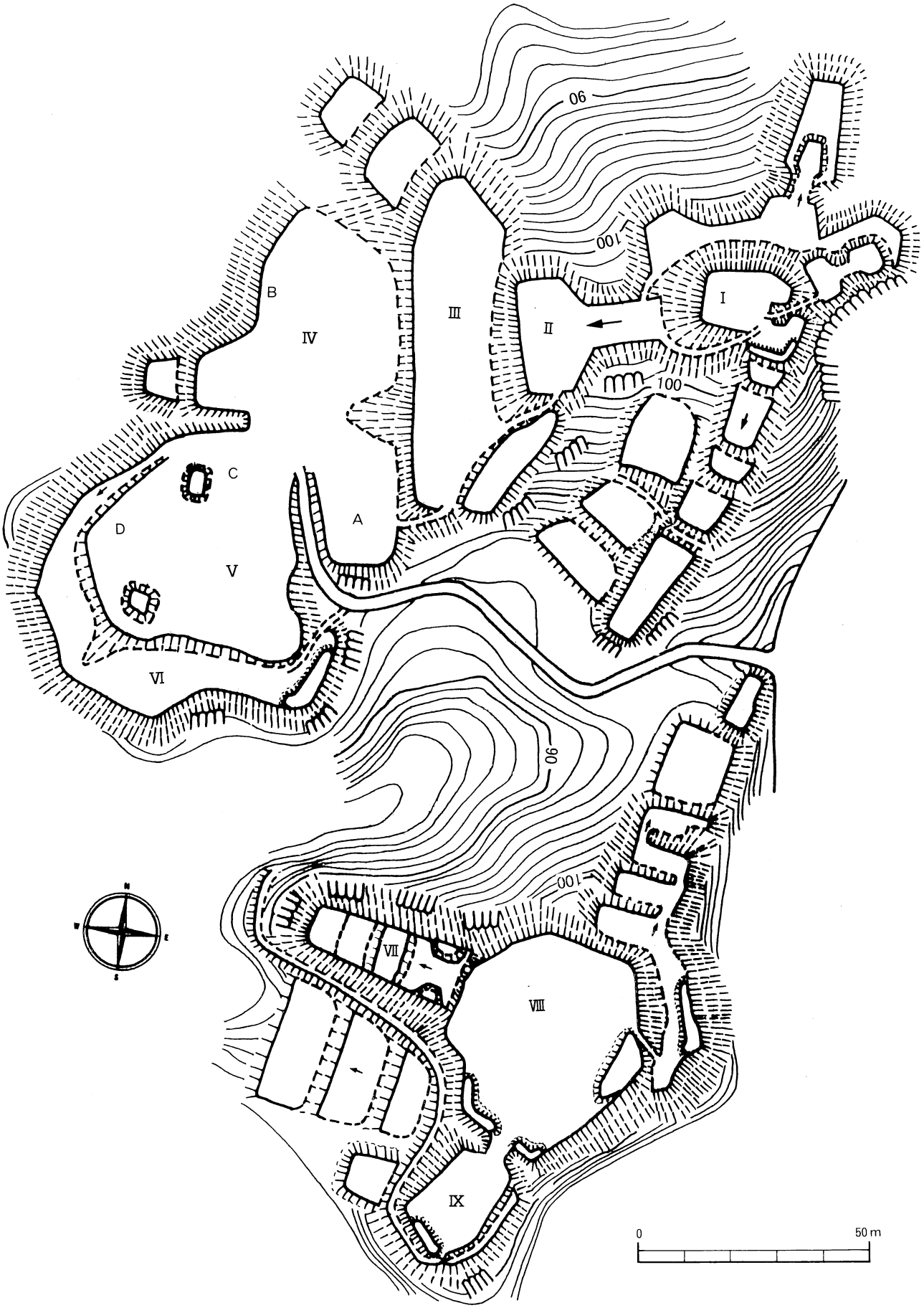
（２）南側の城

Ⅶ～Ⅸの３つの曲輪を中心に３方に延びる尾根にそれぞれ小さな曲輪を配し防御性を高めている。

最高点にある曲輪Ⅷの東隅には、北の城にむかってのびる曲輪や城東をまわる里道を監視する役割の考えられる見張り台的な高まりがみられる。また、縄張り図中の曲輪Ⅶには土橋状の施設が見られⅧ・Ⅸの曲輪部には、虎口があり、敵の侵入を防ぐ役割を果たしたと考えられる土塁が残存している。

現在のところトレンチ内から、ヘラ切り底の土師器片が出土し、造成と考えられる部分も確認されている。

写真16　調査区遠景



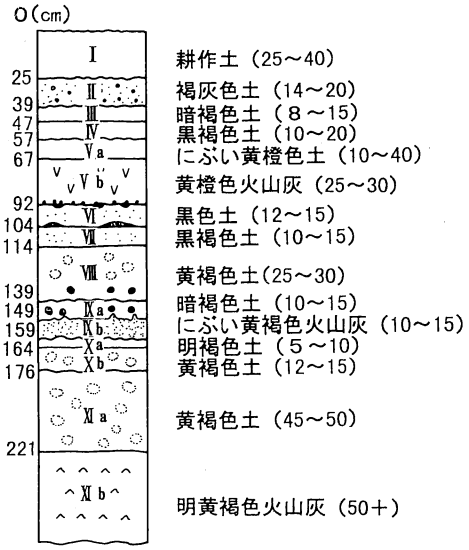
第 20図　本城跡縄張り図

12. 白ケ野遺跡 （清武町大字船引字白ヶ野ほか）

遺跡の立地

白ケ野遺跡は大淀川と清武川に挟まれた標高 90m 内外の台地上に立地する。この台地は、シラス台地とよばれる起伏の少ない地形を呈し、本遺跡をはじめとして多数の遺跡が確認されている。

調査区における基本層序は第 21 図のとおりである。これらのうち本地域で年代区分の鍵層として利用されているのは、Ⅱ層の高原スコリア、Ⅴ b 層のアカホヤ（K-Ah）、Ⅸ b 層の小林軽石（KbP）、ⅩⅠ b 層の姶良 Tn 火山灰（AT）である。白ケ野遺跡では、この他に桜島や霧島火山群を噴出源とする３つのテフラが介在している。



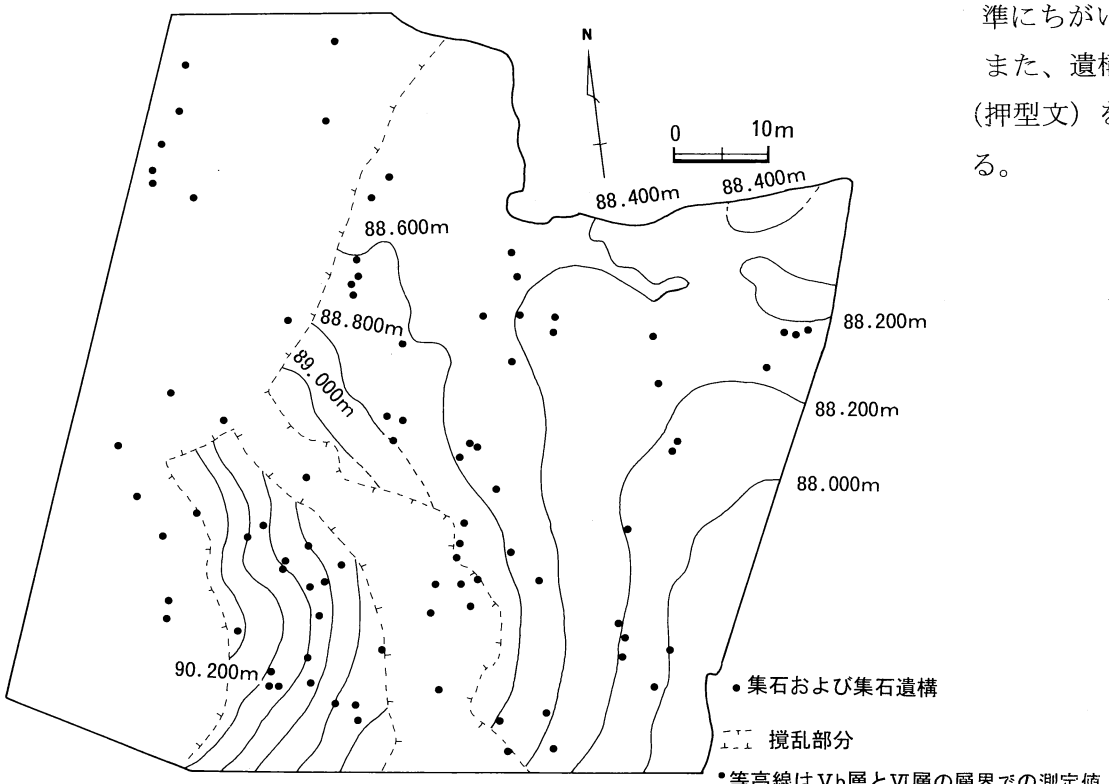
第21図　土層断面柱状図

調査の概要

主な包含層はⅣ層、Ⅵ層、Ⅶ層で、Ⅵ、Ⅶ層から縄文時代早期、Ⅳ層から後期の遺構・遺物を検出した。

（1）縄文時代早期

早期では 98 基の集石および集石遺構、石器、多量の土器を検出した。集石および集石遺構は調査区の北端部に 87 基が集中し、残りは南端部に散在する。北端部は台地の切り立った崖の近くにあって、西側がやや小高い丘になっている。集石および集石遺構は、この丘の東側斜面を中心にして第 22 図のような分布をしている。丘地形の斜面には礫の密集した場所があり、周辺に集石遺構が集中している。検出面はⅥ層およびⅦ層で、掘り込み面の形態や形成層準にちがいが見られる。また、遺構中には土器片（押型文）を含むものもある。



第22図　集石遺構分布図

遺構中の炭化物４点の放射性炭素年代測定の結果では、約 8,200 年前という補正年代値を得た。また、遺構中の炭化材１点の樹種同定では、カヤの木を使っていたことがわかった。カヤの木は常緑の高木で高さ 25m にも達するという。

使用された礫の 98%はこの台地の基盤岩である宮崎層群の砂岩から成る。その他の岩種は、頁岩、尾鈴酸性岩（溶結凝灰岩）、凝灰岩などである。礫の形は円礫を破砕した亜角～角礫が多い。これらの礫が直径 1m 以下の円内に密集して出土する（写真 17）。

土器はⅥ層およびⅦ層から多量に出土する。その多くは山形押型文と楕円形押型文である。また、Ⅶ層には条痕文や突帯文土器を包含する。

石器はⅥ層およびⅦ層から石鏃、石皿、磨石、石錘などを出土する。石鏃は大分県の姫島産の黒曜石とその他地域の黒曜石、チャートを石材にした製品が混在する。磨石の石材の大部分は宮崎県央にある尾鈴山産の溶結凝灰岩からなる。その他の石器は砂岩製が多い。Ⅶ層からは異形石器や水晶などを出土した。

写真17　集石遺構

（2）縄文時代後期

調査区北端のＶｂ層上面およびＶａ層で縄文時代後期とみられる円形や方形を基調とした竪穴住居跡を４基検出した。焼土や炉跡は確認されなかった（写真 18）。

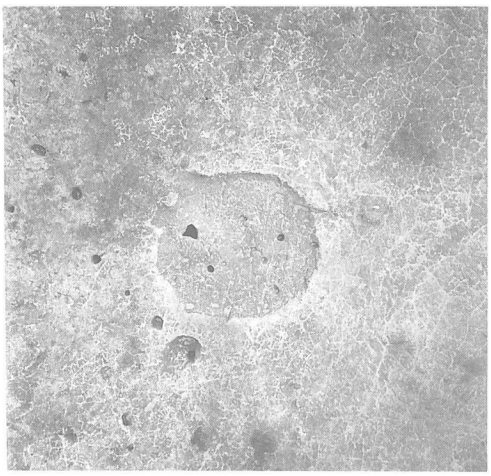


写真18　竪穴住居跡

（3）その他

調査区北端部のＶｂ層上面において陥し穴遺構１基を検出した。穴の大きさは検出面で長軸 140 cm、短軸 100cm の楕円形状を成し、断面ではＵ字形を呈する。検出面から底部までの深さは 170 cm に達し、底部には逆茂木痕と見られる小穴の配列が認められた（写真 19）。遺物を含んでいないので時期は不明である。

写真19　陥し穴状遺構

13．永ノ原遺跡　（清武町大字今泉字永ノ原）

遺跡の立地

本遺跡は宮崎郡清武町を東流する大久保川と岡川に挟まれた、標高 60 m～ 70 mの丘陵の北端に位置する。今回の調査は、前年度の同遺跡の発掘調査を引継いで実施された。遺跡の現況は畑地で、東から西へ緩やかに傾斜し、原地形は台地であり、北端部で急激に落ち込むと推定できる。

調査の概要

今回の調査で縄文早期の集石遺構３基を検出した。そのうちの２基は台地の北端部で、１基は南側で検出された。集石遺構は、いずれも赤化した円礫の組み合わせである。礫の多くは拳大であるが、長さ 20cm 以上の平らなのものも目につく。３基とも、深さ 20cm 前後の掘り込みをもち、２基は、長軸が 220cm を超える大振りなものである。３基ともに、その底に、長さ 15cm ～ 20cm ほどの配石と考えられる礫がある。集石遺構の周囲には、５ cm 前後の割れた礫群がみられる。

また、アカホヤ面で確認された遺構は、用途が不明の土坑、竪穴状遺構が１基づつ検出された。土坑の規模は、長軸約 200cm、短軸約 160cm、検出面から下場までの深さ約 100cm の不整楕円形である。その中には、無秩序に投げ込まれたような拳大の自然石がみられた。竪穴状遺構の規模は長軸約 400cm、短軸約 360cm、検出面から床面までの深さ約 40cm、凸部はあるが正円に近い形である。埋土中に数点の土器片と自然石を含む。ピット群も検出されているが掘立柱建物の有無や配置については検討中である。これらはすべてアカホヤ上部から掘り込んでおり、遺物も殆どなく時期は不明である。

主な出土遺物は、縄文早期の貝殻腹縁による刺突文の土器片、石鏃である。石鏃については、長さ２～３ cm のものが多く、すべて凹基無茎鏃または平基無茎鏃である。中には 3.8cm を超える大型で、えぐりが深く、両端が翼状を呈するものがある。石鏃は、遺跡を南北に貫いた幅 20 mほどの道状の範囲内に集中して検出された。また、集石遺構の周囲からは、石皿、磨石が出土している。遺跡の南端の風倒木の層位横転の中から、平安時代と思われる土師器の甕が出土した。

調査面積に比して出土した遺物の量が少ないことから、遺構の時期、性格等の検討が行える資料に乏しい。

写真20　調査区全景

平成８年度
東九州自動車道　埋蔵文化財
発 掘 調 査 概 要 報 告 書

平成９年３月31日

編集　宮崎県埋蔵文化財センター
発行　宮崎市神宮２丁目４番４号
TEL0985－21－1600
FAX0985－26－2634